

総理の格付け②

鳩山一郎

政治アナリスト
元杏林大学教授

豊島典雄

党人派の元祖

菅総理には「思想がない」「伝わってくるものがない」「総論がない。あるのは携帯電話料金の引き下げなどの各論だけの小さな政治だ」「知的匂いがしない」。「ポスト菅にも人物がない」。有識者からの菅総理、政界への散々な評価である。

1945年代後半の政界では自由党の吉田茂と、自由党を出入りしながら天下取りを目指す鳩山一郎の激しい政争が繰り広げられた。

1953年の暮れ、吉田と鳩山の対立を「松の廊下」の対決になぞらえた森繁劇団の「赤い絨毯」の上演が好評だった。しかし、単なる権力闘争ではない。あるべき国の姿を求める路線闘争である。両派に器の大きい人物がいた。学ぶものが多い時代である。

「戦後の日本政治の中で、いちばん華やかで燦然と輝いていた権力を

めぐる政党の闘いと党人政治家の活躍の時代というのは、吉田内閣を倒して、鳩山内閣を作ったあの昭和20年代末期の政争劇の時代でしょう」(中曽根康弘著・自省録)。

確かに、三木武吉、大野伴睦、鳩山一郎、緒方竹虎、重光葵、松村謙三、岸信介、河野一郎、石橋湛山といった「屈強の古武士たちが政界に登場して、秘策と秘術の限りを尽くして攻防戦を繰り広げたわけですから」(中曽根康弘)。

吉田茂は官僚派の元祖、鳩山は党人派の元祖だ。「鳩山は、いわば坊っちゃん式の大衆路線で、脱占領政策を志し、



鳩山一郎元総理

憲法改正と日ソ交渉という象徴的な政策を掲げて、1954年の選挙に勝ったわけです」(中曽根康弘)。

路線転換の転軸手

鳩山内閣は1954年12月から1956年12月までの2年間と短命だったが、歴史的な存在感は希薄なようだ。

「しかし私は長い間、それは間違いだと言ってきました。なぜならば、鳩山さんは占領政策を転換して、独立日本へと前進させようという意識を明確にもつて、ある程度の路線を示しえた政治家だからです。いわば路線転換の転軸手の役目を果たしました。鳩山さんが主張した憲法改正や日ソ交渉などは、そうした例にあげられます。憲法改正というものは内政上の自主独立路線であり、日ソ交渉というのは、外交上の自主独立路線なのです。

そういう意味で、鳩山さんは脱占領政策、吉田政治からの脱却という面を明確に持って出てきた人です」(中曽根康弘)。明確な国家像があったのだ。

日米協調、軽軍備、経済復興優先の吉田路線と、自主外交、自主防衛、自主憲法の鳩山の路線には明確な違いがあり、激しい路線闘争が展開された。

「清冽極まりない国家再建のための政策論争というものが厳然とあったと思います」(1952年から1955年の頃は、日本の政治上においても非常に輝かしい時代だと私は回想しています。今を生きる日本人が、あのころの国会の議事録というものを、もう1度虚心に読んでみれば、いくつもの国家像についての知恵が数多く入っていることに気付くはず。あの時代の政治史こそ、究める必要があると思います」(中曽根康弘)。

若い政治家には先達の歩みを紐解いて日本の進路を指し示す大きい政治を

学んでほしい。

悲運の政治家

「人間の本性は自由を欲するものである。自由を欲しない人間はいない」(鳩山一郎)。自由主義者である鳩山は終戦直後の1945年11月に日本自由党を結成、総裁に就任する。そして、翌1946年4月の衆院選で第一党になりながらGHQ(連合国最高司令官総司令部)による公職追放の憂き目に合い、1951年8月までの5年間も浪人生活を余儀なくされる。しかも、追放解除寸前の1951年6月には脳溢血に倒れている。

「悲運の政治」と言われる所以である。鳩山一郎の国取りに、2つの壁：公職追放、脳溢血による健康不安：があったのだ。しかし、鳩山は担がれるだけの魅力を十二分に備えていた。「誠心誠意、嘘をつく」の言葉を残した謀将の三木武吉と猛将の河野一郎、知将の岸信介に支えられた鳩山一郎は「将に将たる器」(三木武吉)だった。

反吉田茂で共通する衆院で併せて133議席を有する左右両派の社会党が首班指名で鳩山支持に回っ

たことにより、ついに第20回国会で1954年12月9日、鳩山が首相指名を受けた。鳩山の執念が実った瞬間である。盟友の三木武吉はただ、一言「よかったなあ」と言い、河野は大声を上げて泣いた。首相指名を受け、首相官邸に入った鳩山に新聞記者の間から拍手が起った。判官びいき、とはいえ、まさに例外的な光景だ。

鳩山の業績には、自由党(緒方竹虎総裁)と日本民主党(鳩山一郎総裁)の保守合同、すなわち自由民主党結成もあるが、何と言っても、日ソ共同宣言による日ソ国交正常化と、ソ連の妨害を受けていた国連加盟だ。

日ソ国交正常化

自民党幹事長だった岸信介は「日ソ交渉とひと口に言うが、あれは鳩山さんが総理・総裁だったからできたことだ」(自由民主党党史 証言・写真編)と言う。というのは吉田茂の流れを汲む旧自由党系は共産主義のソ連との交渉には反対か、さもなくばお手並み拝見か、冷たかった。

「日ソ交渉をやり抜いたのは、鳩山一郎さんの信念と行動力だ。鳩山

さんは政治的生命と肉体的生命をかけていた。決して生やさしいものではなかった。

鳩山さんの狙いは大きく分けて3つあった。北方領土返還、抑留者帰還、国連加盟がそれだ。そのうち、北方領土返還はタナ上げというか、継続審議というか、結論の出ないまま現在に至っている。しかし抑留者帰還と国連加盟は見事に実現した。

当時の日本の国力を思えば、3つのうち2つを成功させたということは大きな収穫だ。……鳩山さんの功績は、いくら評価しても評価し切れないほど大きい」(岸信介)。

1956年10月、病軀を押しての命がけの訪ソだった。鳩山首相秘書官の山下元利は「日ソ交渉で鳩山首相が病軀を押しモスクワに行かれたが、あれも大変なことだった。

航空機の状況も現在では想像もつかないくらいひどいものだった。シベリア上空を飛ぶ北回り線も無く、プロペラ機で3日3晩かけて南回りのコースをとるのだから並大抵ではない。健康な人でもこたえるのに、鳩山首相はその身体でタラップを降り降りして、車椅子でモスクワに乗り込んだ。

これは常人以上の強い精神力の持ち主でなくては、とてもできないことだ」(自由民主党党史 証言・写真編)と回想している。

困難な交渉の末、10月19日に発表された日ソ共同宣言の内容は、

- ① 戦争状態の終結
- ② 大使館、領事館の開設
- ③ 国連憲章の原則・自衛権・不干渉の確認
- ④ ソ連による日本の国連加盟支持
- ⑤ 抑留者の即時帰還
- ⑥ ソ連による賠償・請求権の放棄
- ⑦ 通商関係の交渉開始
- ⑧ 漁業協力
- ⑨ 平和条約交渉継続、および平和条約締結後の齒舞諸島・色丹島の日本への引き渡し
- ⑩ 批准と批准書の交換

という10項目からなっていた。

その結果、日本の国連加盟が実現した。この意味は大きかった。

岸信介は「これでしょうやく1人前になった。世界の一員として、大手を振って国連に入ることができ。この国民の自信が、それからの日本の発展にどれくらい役に立ったかわからない」と回想している。